不定期刊行　　第 522 号　2014.09.25

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩
大町高等学校

船窪～蓮華、マイナーな山縦走

毎日大町高校の窓から見ていると蓮華岳ののっぺりとした山容は極めて大きい。その横に高さこそ及ばないものの、三角形のピラミダルな姿で個性を発揮しているのが、北葛岳。これまで行く機会のないまま、登り残してきたのが船窪岳から北葛岳を経て、蓮華岳まで続く区間だった。9 月 13 日から 14 日の連休は、信高山岳会の仲間とのんびり山小屋を利用して、七倉尾根から入山し、船窪岳と蓮華岳をつないで針ノ木峠から扇沢まで歩いた。メンバーは沼田、遠藤、杉山、重田、浮須、僕の 6 名である。山経験の豊富な面々だったが、なんと 6 人が 6 人ともこの区間は初めての登山というのもまた珍しいことであった。5:30 に大町高校に集合、車回しで向かった扇沢は、3 連休の中日ということもあり、すでにこの時間でも最下部の臨時駐車場に誘導された。1 台を扇沢においた後、登山口の七倉に向かうが、こちらもすでに駐車場をはみ出た車が車道にもあふれている。ここまで混雑しているというのは想定外だった。

しかし、大多数はブナ立て尾根や湯股に向かう登山者だったのだろう、七倉尾根は車の数ほどには混んではいない。登り始めは青空が見えていたが、途中からは残念ながら期待していた眺望はガスの中。それでもそれほど暑くないのは却って好都合、鼻つき八丁の急坂も、そんなに汗をかかずに済んだ。のんびりと自分たちのペースで登ることおよそ 5 時間、12 時少し前には船窪小屋に到着した。船窪小屋は大町高校のＯＢでもある松澤宗洋ご夫妻の切り盛りする北アルプス唯一のランプの小屋。お母さんこと女あるじの寿子さんが出迎えてくれた。まだ時間が早いので、眺望さえよければ船窪岳あたりまで足を延ばすところだが、ガスで楽しみにしていた眺望はお預け。これではどこに行っても同じことと、小屋の前のテラスで安着祝い。そのままぐでぐでと飲み始め、結局そのまま夕食までテラスを占有してしまった。

船窪小屋は温かいもてなしが嬉しい。夕食も決して豪華な食材を使ったものではないが、心のこもったお母さんの手料理が自慢だ。冷蔵庫もない山小屋でこんなにも手の込んだ料理を賞味できるとは、驚きである。夕刻からは時折ガスの陰から槍ヶ岳や立山・劔、針ノ木などが見え隠れし、最高の景色も料理をさらに美味いものにする。本当は夕食後の囲炉裏の団欒も小屋のウリの一つなのだが、（飲み）疲れた中高年は、7 時前にはいい子で床に着いたのだった。

翌 14 日 5:20、寿子さんと記念写真を撮影した後、朝焼けに染まる峰を眺めながら出発。15 分で七倉岳に到着する。今日は 360 度すべてが見渡せる。まずは正面に見える北葛を目指して、およそ 200m を下る。7:15 北葛岳の山頂から振り返ると 3 層構造になった船窪小屋が、小さいながらも稜線上で自己主張している。ここから先のコースは初めてのルートである。正面の蓮華は大きく、その前にある鞍部は頂上との標高差 624m を誇り、来るなら来てみろとばかりに、登山者に挑戦状をたたきつけているかのようだ。「南アならこのくらいは普通だ」という飯田の杉山さんの言葉にその通りだと思いつつ

も、少々気持ちの萎える蓮華の大登りである。鞍部まで下ると、蓮華への最初の登りは岩稜だった。針ノ木から眺めていると女性的でたおやかなイメージの蓮華だが、この登り口の岩場は、蓮華のイメージを大きく変えるものだった。岩場を登り切ったところで、山ガールの 2 人組に会ったが、それ以外は誰にもすれ違わなかった。3 連休の北アルプス、昨日の駐車場の混み方からは考えられない静かな縦走路だ。（ちなみに新聞報道によれば槍ヶ岳では、肩の小屋から穂先で大渋滞が発生し、往復に 6 時間を要したそうだ）夏はコマクサの大群落で有名な蓮華の白い砂礫地に、紅葉したオンタデがアクセントになり、遠景の針ノ木、劔と美しい景色を成している。思い思いのポーズで写真を撮りながら登ること 2 時間、10:25 に蓮華の頂上に立った。僕にとって空白地帯だった北葛と蓮華の間がつながった。高曇りの空の下、360 度遮るもののない山頂で至福の時間を過ごした。針ノ木峠を経由して扇沢に下り着いたのは、14:30。マイナーな山をゆったりとした気分で堪能した。

センター高校生クライミング研修会

9 月 6 日、7 日の両日山岳総合センターの高校生クライミング研修会が行われた。参加校は上田、上田西、岡谷工業、飯田 OIDE 長姫、飯田風越、大町の 6 校。この研修会は生徒のみならず、顧問同士の相互研修にも大きな意味がある。1 日目はギアの説明やクライミングの基本を学んだあと、トップロープ、リードでのクライミングと確保の実践。2 日目は、ボルダリングでムーブを学んだ後、顧問班は、人工壁を使って、セルフビレイ、リードとその確保、セカンドとその確保、トップとセカンドの交代、懸垂下降までの一連の流れを、役割を交代しながら行い、マルチピッチクライミングのシステムの検証をした。高校生の山岳部の活動の中で、人工壁でのクライミングをする機会は増えてきているが、セカンドの確保やマルチピッチは、外岩へ行かない限り、なかなか実践する機会もない。しかし、このシステムはクライミングでなくとも危険個所の通過の際のフィックスロープを張る技術でもある。そういう意味では、山岳部の生徒を引率する顧問としては安全登山のために確実に身に着けておきたい技術でもある。

参加していた先生方の中には、初めてクライミングに挑戦した先生もいたが、経験者・初心者を問わず互いの技術を交流しあう中で、実のある研修ができた。今は高校生クライミング研修会という名称で行われているが、この研修会はもともと、クライミングを指導できる指導者を養成したいということから、高体連がセンターに働きかけて顧問向けに開設した講座でもある。来年はもっと多くの先生方が参加してくれるといいと思った。互いが持っているものを出しながらのこういった研修会の意義を再確認したい。

中信地区新人戦、6 校 38 名参加

19、20 の両日、爽やかな秋晴れの下、中信地区の新人大会が行われた。北から大町北、大町、池田工、深志、蟻ヶ崎、県ヶ丘の 6 校から 38 名（男子 32、女子 6）が参加。5 年前には全国大会にも出場したこともあり、これまで連綿と活動の続いてきた塩尻志学館の参加がなくなってしまったのは寂しい限り。ただし、生徒数があまり変動していないのはまだ救いである。会場の美ヶ原、茶臼山一帯で、初日は競技を行い、夕刻から 2 日目にかけては、生徒同士はもとより、顧問の間でも大いに交流を深めた 2 日間だった。